

ポスト・グローバリゼーション下のモビリティと場所

——時間・空間の新しい経験を通して——

2016年9月10日札幌学院大学

大妻女子大学 吉原直樹

I グローバリゼーション・スタディーズの4つのフェイズ

- ・モビリティと場所
- ・時間・空間の新しい経験
- ・モビリティとローカリティ、およびローカリティを通底する「共同性」の内実
→場所政治の新しい次元
- ・国民国家の変容
- ・ポスト・グローバリゼーション下における以上4つのフェイズの読み込み

* 白井聡・内田樹『属国民主主義論』

「いくつかの国家地域グループを形成して、それが実質的な政治単位となって、それぞれの集団的目標に沿って動いている」、そうした政治単位を「帝国ととらえると……帝国の内部にあっては、現在の国民国家は解体されて、もっと規模の小さい、言語共同体や、部族集団、宗派団体のような、よりローカルな下位集団に分割されてゆく」

II モビリティと場所

(1) フローとしてのモビリティ：アーリのモビリティ・スタディーズ

『場所を消費する』(1995/2003年)、『社会を越える社会学』(2000/2006年)、『自動車と移動の社会学』(2005/2010年)、『グローバルな複雑性』(2003/2014年)、『モビリティーズ』(2007/2015年)、『オフショアリング』(2014年/近刊)

・「空間論的転回」から「移動論的転回」へ

① 移動論的規準の設定

「移動……には、それぞれ異なる時間性を有する種々の物理的な動きが見られる。たとえば、立ち止まること、ゆったりすること、歩くこと、登ること、踊ることから、テクノロジーによって強化された移動……実にさまざまである。[さらに]日、週、年単位のものから、人びと一生涯に及ぶものまで、大きな幅がある。また、マルチメディア上の映像と情報の移動も含まれ、さらには、ネットワークに組み込まれたコンピュータを通じてなされる一対一、一対多、多対多の通信のなかでのバーチャルな移動も含まれる。移動論的転回には、デジタル状のフローを通じて、人びとの交通とメッセージ、情報、映像の通信とがどのように重なり、同時に起こり、収斂するのかを検討することも含んでいる。さらに、物理的な移動がどのように上方、下方への社会的移動と関係するのかも、移動の分析の中心をなしている。物理的ないしバーチャルに場所間を移動することは、

地位や権力の源泉、一時的ないし恒久的に移動する権利の表れとなることもある。そして、移動が強制されるところでは、移動が社会的な剥奪と排除を生み出す場合もある。」
『モビリティーズ』

② モビリティ・スタディーズの主要なカバレッジ

- ・モビリティ（移動性）そのものが帯同する諸形態／現象ではなく、モビリティが抱合する社会的諸関係、感情の構造*に照準
 - *「速度術」（ヴィリリオ）、「天使」（セール）、「液状化するモダニティ」（バウマン）、「運動空間」（スリフト）、「平滑空間」（ネグリ&ハート） etc.
- ・社会組成の境界内および境界を横断して動く、非線型的で不均一なグローバルなネットワークとそこから派生する予測不可能で再帰的な「創発」のメカニズムに着目
- ・社会生活のモバイル化、メディア化の実相分析

(2) 場所と非場所のダイナミクス

- ・「閉じられた領域^{テリトリー}的箱」の批判的検証（A・アッピア／D・ハーヴェイ）
- ・現前^{ヴァーチャル}／不在^{リアル}を越える、「常に動いている」諸主体の布置構成（constellation）に照準した「住むこと」の問い込み
- ・「常に動いている」モバイル環境下での、他者と「^{コ・プレゼンス}ともにある」機会の創出と情報の単位へと再構成される個人の非同期性の分析
- ・場所／非場所の弁証法的メカニズムの解明（→「領域的なもの」から「関係的なもの」へ、そして「関係的なもの」から「領域的なもの」へ）
- ・「グローバル・アトラクタ」（アーリ）の創造的読み込み（後述）
- ・コミュニティ・パラダイム・シフト（吉原 2011 ；近刊 a ；近刊 b）

III モダンの時間と空間：産業的生産様式と時間・空間経験

- ・イリイチの産業的生産様式を<読む>
イリイチ「コンヴィヴィアリティ」からのアプローチ：『コンヴィヴィアリティのための道具』2015年（新版）
- ・産業的生産様式と時間・空間経験
 - (1) 産業的生産様式の機制
 - ・「限度なき成長」（＝「生産至上的な社会」）「極端な社会の分極化」（＝「持てるものがより多くを受け取り、持たざるものは現に持っているわずかなものさえ巻き上げられる」と分裂的な専門化）「共同体組織の掘り崩し」（→「生きられる共同性」の剥奪（後述））
 - ・均一化の作用と人間に対する操作
 - 「教育的、医療的、行政的な^{セラピー}療法の形」をとる操作
 - ・「管理の集権化」と「単位量のかたちで送り出される」産出物

(2) 産業的生産様式下の時間・空間経験 (→モダンの時間と空間)

①原型としての「機械化の様式」(マンフォード)

マンフォード『機械化の神話』(1970/1990年)

・「機械的規則性」としての「時間を厳守すること」、「空間を測定すること」、「具体的な事物と複雑な出来ごとを抽象的な量に変換すること」

②モダンの時間と空間(吉原 2002:2008)

・モダンの時間:均質的に流れる「絶対的時間」

社会的時間から切り離された、「時間の細分化」、「社会生活のタイムテーブル化と数学化」(ラッシュ&アーリ)に根ざす「単線的で同質的で連続的な時間」

→クロック・タイム cf.「共通の計量化された時間」(真木悠介)

・モダンの空間:「幾何学の連続的空間」(ブルデュー)

もともと非連続的で非同型的な実践を投影し、それゆえ多様性を豊かに湛えた空間を消去して立ちあらわれる「幾何学の連続的空間」

→「冷徹な合理性」に裏打ちされた「正確な地図」(ハーヴェイ)

IV 「共同性」/「生きられる共同性」とモダンの時間と空間の両義性

(1)「共同性」/「生きられる共同性」

・「共同性」:「人間の『生』の営みにおける共同性」

→「住まうこと」に根ざして、「共同生活においてあらわれる共通の課題を地位とか身分などに関係なく共同で処理するところから派生する」もので「自然のリズムやヴァナキチャーなものに必ずしも還元されない共同性」

→「土地の共同」(清水盛光)に回収されない、異なる者同士の相互性/非同一性に基礎

⇒「生きられる共同性」の原拠

⇒モダンの時間と空間は「共同性」/「生きられる共同性」の否定の上にあるか?

(2)「共同性」/「生きられる共同性」とともにある時間

・複数的に経過する時間

・感覚的、質的に生きる身体と結びついた「拡がりのある時間」(→「生活世界を主体的に生き抜く人びとの、いわば相互作用としての時間」(吉原 2011))

①「内的時間」(フッサール)の機制

・過去、現在、未来の区分が中心となるような年代記的なテーマ設定からは出てこない

→過去は現在によって自由に出し入れが可能となる「引き出し」のようなもの

→未来は現在からのみ想到可能

⇒現在が人びとの「生きられた記憶」としてあるかぎりで存立し得る内的時間

②「根源的な時間」(広井良典)

→「めまぐるしく変化していく日常の時間の底に」ある「ゆっくりと流れる層」

→『市場・経済』の時間とは別の流れ方をする……『共同体（コミュニティ）の時間』

③「垂直に積み重なる時間」（野家啓一）

私たちの記憶の中に沈殿している時間

cf.「水平に流れる時間」

（3）「共同性」／「生きられる共同性」が内包する空間

- ・「領域的なもの」に回収されない空間
- ・脱領域的な、差異に充ち溢れた「人と人との関係」、つながりがメルクマールとなる → 関係性に根ざす空間
- ・関係性に根ざす空間の原型／範型

①中世の連歌の場（松岡心平）

「物語の統一性を逸脱して、モザイク状の連鎖となっている」集団の場 →「異質の声、流れ、伝統の合流点を建設」 →「家族、身分、階級、といった人間の出自にかかわる自然の共同性から離れ、無縁の者たちによって作られた人工の共同性」

cf.地縁

②「通態」（ベルク）の機制

環境を媒介にして諸個人間で「……を越えて」と「……を横切って」という形で築きあげられる関係づけ（＝相互作用） →「内面化された起源」＝「内向化された歴史」に閉じない

（4）産業主義的生産様式のボーダレスな展開と臨局面への到達と時間・空間の新しい経験

①産業主義的生産様式のボーダレスな展開

- ・世界的な経済機能の分化と統合（化）
→一方での世界の相互依存性の拡がり、他方での「世界の不均等発展」（正村俊之）
→「時間と空間の圧縮」（ハーヴェイ） cf.「時間と空間の分離」（ギデンズ）
- ・「絶対的時間」と「幾何学の連続的空間」の一層の進展
⇔「拡がりのある時間」と「差異に充ち溢れた関係性にもとづく空間」の無化
- ・促迫要因としての国民国家の位置変容
産業主義的生産様式の外への展開に対する制約要因から促迫要因へ
「規制緩和や民営化に典型的に表れているように、近代国家のさまざまな制度や機構は、グローバリゼーションを推し進める装置へと転換してきた」（伊豫谷登士翁）
→『庭園師』から『猟場番人』へ（バウマン）の役割変更
→「諸個人を……成長、発展に集列化」（吉原 2011）
- ・ローカルな場における人びとの生存維持手段の喪失、さまざまな亀裂／裂開の埋め込み

②臨局面にある産業主義的生産様式

- ・ 臨界局面：「軌道の外れた成長」「エコロジカル・フットプリントの持続可能な水準を超えた経済成長」（ラトウーシュ）、「過剰消費のことであり、万人の『妥当な』ニーズの充足を可能にすると考えられる水準を超えた生産水準」（イリイチ）
 →「生産力至上主義がもたらすカタストロフ」（ラトウーシュ） →成長とか発展といわれるものがその極に達して、それらが抱合しないとされる価値や要素が至上のものとなるような構造的転換を遂げる社会 ⇒脱成長^{デタロワサン}の社会の到来
- ・ 国民国家の脱成長への位置シフト
 →一方で「絶対的時間」と「幾何学の連続的空間」を極限化しながら、他方で「拡がりのある時間」と「差異に充ち溢れた関係性にもとづく空間」を取り込む
 →「共同性」／「生きられる共同性」から乖離しながら、それを篡奪する

③時間・空間の新しい経験

- ・ グローカル化の機制：成長から脱成長への＜反転＞
 「世界の均質化」（広井良典）→ローカルの包絡 →（反転）→異なる者同士の相互性・非同一性 →「脱産業経済における生活様式」（ラトウーシュ）
 「絶対的時間」と「幾何学の連続的空間」を極限化 →「拡がりのある時間」と「差異に充ち溢れた関係性にもとづく空間」の再押し上げ

↓

＜モダンの時間と空間の両義性の確認＞

ex) 「内的時間」（フッサール）の再検証／解読

時間図表（Zeitdiagramm） 図1 参照

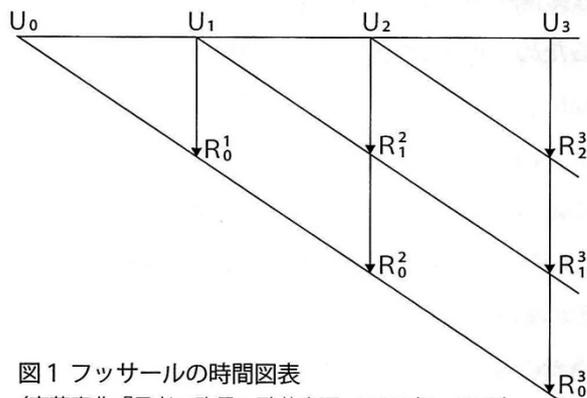


図1 フッサールの時間図表
 (斎藤慶典『思考の臨界』勁草書房、2000年、46頁)

横軸：次々に現われては消えてゆく根源的印象（Urimpression）

縦軸：過ぎ去りつつあるものを現在に繋ぎとめ保持する過去把持（Retention）

→フッサールからシュッツへ

V 場所政治の新しい次元

- (1) フォーディズム下の「空間政治」（ルフェーヴル）

- ・1968年パリ革命 ユーロ・コミュニズム
- ・「都市革命」「都市への権利」「都市闘争」
- ・価値観点から使用価値観点へ
- ・集合的消費と都市社会運動（カステル『都市問題』）
- ・階級同盟から city trenches（グラムシ&カツネルソン）へ

(2)「空間政治」から「場所政治」へ

- ・「下からのグローバリゼーション」「包摂的なグローバリズム」「^{トランスナショナル}国境を越えた社会的諸勢力の……共同のコミットメント」（ハーヴェイ）
- 反グローバリズム／ポスト成長運動、連帯経済
- 「ずれを伴った複数のローカリズム」vs「根を持ったローカリズム」

①「ずれを伴った複数のローカリズム」の土台／審級

- ・「グローカル・アトラクタ」（アーリ）の機制
- 「グローバルな[場所からの]脱埋め込みは、同時に起こる『ローカル』なものの強化増大と相まってかろうじて生じる」
- ・ボーダレス／クロスボーダーなヒトのフロー&グローバル・コンプレキシティの増大→ローカル／グローカルの次元での「複合的で重層的、かつ乖離的な秩序」（アパデュライ）形成
- ・「内在に還ることなく、『外』に向かって開かれている」（ブランショ）相互作用⇄モビリティと背中合わせで存在する「共同性」
- 「分離されたままに、相互に関係をもつ」「隣り合っている者たちへとも開かれている」「自分に閉じこもることなく、しかし、また全体に融合することもない共同性」（土屋圭一郎）
- cf.「境界の明確なアイデンティティとメンバーシップ、閉鎖性を有する諸規則、仮想的な永続性を有している……完全に共同性のある集団」（ブラウン）
- 「市場中心の社会によって支配される社会」にも「[伝統的な]共同体束縛」（ラトゥーシュ）にも回収／回帰されない「人と人との関係」

②「場所政治」の作動原理

- ・「創発的なもの」（the emergent）
- 「それは、複数の主体（変化をもたらす^{エージェント}行為主体）が相互作用を介して行為することで、個々の行為を越えて新たな集合的特性／質的に新しい関係が生み出されることである。ここで着目しなければならないのは、上述の相互作用によってさまざまなつながりが交互に並び合い、交わり合い、結び合い、そして影響し合って、『予測のつかない突然の変化』（アーリ）が起こることであるが、その場合、重要なのは、変化にたいして構成主体が能動的に対応し、より高次の特性を生み出す（＝創発する）という点である。つまり、『創発的なもの』とは、諸主体間の交流としてある相互作用が新たな変化をもたらす、そうした変

化が累積されることで人びとのつながりとか関係などが変わり、システムの構造が変わっていくプロセスに主軸が置かれているのである。」(吉原 2011)

・「節合」(articulation)の機制

言語活動／現象の説明→制度や組織の変容をうながす社会的実践の文脈で使用(ラクラウ)

→諸主体がおのおののアイデンティティを変容させながら、諸要素の関係を打ち立てること、すなわち諸要素を新しい構成へと組み直すことを含意

→諸主体の「自由な越境」にともなう、諸主体間の多元的で相互的なつながりを横に広がるインターフェイス上で示すもの

cf.内発的發展

→メディアとしての「節合」の可能性

(3) Fサロンのこと——「節合」の一つの原初的形態 *詳細は吉原(2013)参照

・非「国策自治会」としてのF自治会

福島第一原発の爆発によって会津若松市に避難してきた大熊町民のF仮設住宅=自治会から出現 /非「国策自治会」としてのF自治会/異なる他者との交流/外に向かう人びとの関心 cf.避難者を「集列化」する「国策自治会」

・「フットワークの軽い」参加、気楽に語り合う場としてのFサロン

全国各地、さらに海外からのボランティアと「出会う」→「よその人の目」息づくとともに、避難者の「内なる」思いが「外」に「伝わる」→避難者の「あいだ」で自分たちの生活課題を「発見」し、それらに「向き合う」

→身近な、「よその人の目」を介しての自分たちの立ち位置の確認

→相互に関係を持つことに根ざす隣り合うことから派生する「対話的なコミュニティ」、すなわち「利己的な私利や社会的人格概念には還元できない」(デランティ)つながり

→被災/避難による「苦しみ」や「悩み」、家族や人間関係の「ゆらぎ」、さらに差別され排除されてきた「無念」を「異なる他者」と語り合うことによって作りだされる、将来への希望を抱かせるような何らかの契機が埋め込まれた「情熱的な紐帯」(ムフ)

⇒モビリティと背中合わせで存在する「共同性」/「生きられる共同性」の確認

⇒剥奪されたはずの「共同性」/「生きられる共同性」の奪還/再獲得へ

⇒「相互依存関係にあるハイブリッドなさまざまなネットワークやフローを驚くほど多重的かつ多系的に生み出している」(吉原 2011)脱成長の社会状況に部分的に「共振する」

VI ポスト・グローバリゼーション下における場所政治のゆくえ

(1) 国民国家のいっそうの「ゆらぎ」

・現象としての「多発」

ISIS、ロシアのクリミア半島併合、中国の南方進出、英国のEU離脱、フランスの極

右政党の「国民化」、トランプ旋風……

- ・ 下方「帝国」化する国民国家（白井・内田）
議会制民主主義から「属国民主主義」へ
国民国家を席捲する「循環体」（ラトゥール）の形成

(2) ネオリベリズムとコミュニタリアニズムの「あいだ」

- ・ 国民国家の脱成長への位置シフト（前掲）
- ・ グローバルな地政学の見直しと国民国家の「方向転換」
- ・ 権威主義的／ポピュリズム的政治と「物神崇拜の政治」（ハーヴェイ）の「共振／共進」
- ・ 「根を持ったローカリズム」による「共同性」／「生きられる共同性」の取り込み（篡奪）

(3) 「共同性」／「生きられる共同性」の再定位

- ・ 「ずれを伴った複数のローカリズム」にもとづく「共同性」／「生きられる共同性」の奪還／復位
- ・ 他者と「^{コ・プレゼン}ともにある」機会の創出と諸個人の個別化（「ばらばらの情報の単位として再構成されること」）からの回避
- ・ 「共同性」／「生きられる共同性」に埋め込まれた二つの時間
→ 「経験のストック」（シュッツ）と積み重なった時間の厚み
→ 「共同性」／「生きられる共同性」の存続に不可欠な人びとの「死」
- ・ 社会の一員としての「死者たち」
cf. 「贖罪的儀礼」「喪」の社会的機能（デュルケム『宗教生活の原初形態』）

※本報告は、拙稿（近刊 b）に大幅に依拠している。

参考文献（報告者のものに限定）

- 吉原直樹，2002，『都市とモダニティの理論』東京大学出版会
- ，2008，『モビリティと場所』東京大学出版会
- ，2010，『コミュニティ・スタディーズ』作品社
- ，2013，『「原発さまの町」からの脱却』岩波書店
- ，近刊 a，「コミュニティの社会学から社会史へ」中野佳裕・ジャン＝ルイ・ラヴィルほか編『21 世紀の豊かさ——経済を変え、真の民主主義を創るために』コモンズ
- ，近刊 b，「モダニティ・共同性・コミュニティ」金子勇編『計画化と公共性』ミネルヴァ書房
- ，近刊 c，「いまコミュニティは——『共同性』をめぐる相克」広井良典・大井浩一編『2100 年へのパラダイム・シフト』作品社